
初めては幼なじみ

亜果利

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初めては幼なじみ

【Nコード】

N5429Y

【作者名】

亜果利

【あらすじ】

高校一年生の高井沙都は、彼氏が出来たその日に、隣に住む幼なじみの畑野涼に押し倒されてしまう。

そして、涼と結ばれ、涼への熱い思いに気づく。

彼氏ができたんだ（前書き）

幼なじみとの恋。
複雑な恋愛です。

彼氏ができたんだ

「涼――聞いて――」

わたしこと、高井沙都は、学校帰りの制服のまま、隣に住む幼なじみの畑野涼の部屋のドアを開けた。

「なに？」

涼はベッドの上にゴロンと横に寝そべって、モンハンしていた。

「あーのさ、わたし、彼氏ができた」

わたしの言葉にチラリとこちらを見た涼は、ゲームをやめてベッドからおきあがった。

「彼氏？」

「うん。となりのクラスの青木文也くん。野球部だよ。涼はサッカー部だから、グラウンドで見たことあるでしょ？」

そういうながら、涼のとなりにチョココンとすわって、陽に焼けた顔をのぞき込んだ。

「なんだよ……それ」

「え？」

「沙都、おまえ、そいつが好きだなんて言ったことなかっただろ？」
涼が手にもっていたPSPをベッドにほうりなげた。

「うん。だって、今日告白されて、初めて青木クンのこと知ったんだもん。なかなかイケメンだし、カッコイイって思ったから」

「はあ？ なにそれ？」

いつも、ボウッとしている涼がきゆうに怖い顔をした。

小さい頃から毎日会ってて、同じ年で、小、中、高全部一緒に、わたしの言うことを聞いてくれてた涼が……

わたしをにらみつけた。

「いいじゃん。別に。わたしのこと好きだって言ってくれたんだもん」

にらんでいる涼から目をそらして、そうつぶやいた。

「自分のこと好きだって言ってくれた男なら誰でも付き合うのかよ」
「誰でもって、わけじゃないけど……」

「その青木ってヤツがカッコよかったからか？」

「うん。まあ……そんなかんじかな」

「おまえ、それでいいのかよ」

いきなり、もの凄い力で、右腕をつかまれた。

「いたい。いたいよ。涼……」

「そいつが、こんなふうに、腕つかんできたらお前、どうすんの？」
いつもの涼じゃなかった。

色素のうすい、茶色がかった目を大きくみひらいて、こんどは左腕をつかんできた。

「青木クンはこんな乱暴しないよ」

首を振って抗議した。

「お前、そいつの彼女になるんだろ？これくらい覚悟しといたほうがいいんじゃない？」

ベッドに両膝をついた涼が、わたしに顔を近づけてきた。

「わたしに彼ができたからって、逆ギレしないでよ」

「逆ギレ？」

「自分は彼女いないからって、当るなってこと。涼だって、この前告白された子と付き合えばよかったんじゃない」

すると、わたしの両腕を持ったまま、そのまま、おおいかぶさってきて、わたしはベッドの上に押し倒された。

涼と結ばれて

倒れ込んでも、涼はわたしの両腕をベッドに押し付けたまま、はなさない。

手首を強くにぎったままだ。

「俺は、沙都みたい……誰でもいいなんて、どうでもいい気持ちで女と付き合えないんだ」

「それなら……わたしに当ることないじゃんか。はなしてよ」

そう言って、眼の前十センチまで顔を近づけてきた涼をおもい切りならんだ。

「バカヤロウ！」

耳元でどなりつけてきた。

「耳元でそんな大声出さないでよ」

すると……涼が、きゆうに泣きそうな顔をして

「俺の気持ち、お前……本当にわかんないの？」

目の前の涼のうすい唇が震え出した。

「涼……の気持ち？」

「沙都が、コンビニのプリン食べたって言ったら買ってきたり、沙都の好きなアイドルのビデオ予約したり、眠いのに、女友達とケンカしたお前の悩みきいたり……俺は……お前のなんだったんだ？ 兄妹か？ やっぱ……ただの幼なじみなのか？」

「涼……」

涼の切れ長の目からポロリと涙がこぼれた。

そして、わたしの頬にポタリと落ちた。

「俺は……ずっと……沙都が好きだったんだ」

そう言った涼が……

はじめて

男の子に見えた。

ただの幼なじみの涼が……

男に見えた。

わたしの方がずっと背が高かったのに、いつのまにか追い越されて……

それでも、ずっと涼はわたしの幼なじみだと思ってた。

なんでも、わたしのことが分かってくれて、言うことを聞いてくれる、都合のいい幼なじみだと思ってた。

そして、今、男の顔で泣き出した。

サッカーしているときの真剣な顔とはまた違う、初めてみる涼の男の顔。

ゆつくりと、わたしの腕をはなしてくれた。

つかまれていた手首がジンジン痛む。

震えながら、涼のほほに手を伸ばした。

「涼……」

もうひとしずく……涙が落ちそうで、それを指ですくった。

「だから……好きでもないヤツと付き合ったりするなよ」

「涼……」

「沙都が……ほかの男にキスされたり、抱かれたりするのを想像するだけで……俺、発狂しそうだ」

「涼……発狂なんかしないでよ」

「沙都……」

涼がゆつくりと顔を近づけてきた。

唇が重なった。

まさかのファーストキス。

「イヤだって……言わないのか？」

目を閉じたまま

「言わない……よ」

そう返事をすると同時に、

フワリ、フワリと重なっては離れて……

そして、だんだん重なっているほうが長くなって

口の中に舌が入り込んできた。

何度も何度も舌を絡めて来て、離れる度に、吐息がもれて……
「あっ……涼……」
何も抵抗できなかった。

涼と結ばれて

涼の唇が首すじにおりてきて、手のひらは制服のブラウスの上から胸に触れてきた。

ゆっくりと、優しく、胸にタッチされて、頭のなかがボウっとし始めた。

「あ……涼……」

「沙都……沙都……好きだ」

耳元でそうささやかれて、涼の広い背中に腕を回した。

「涼……」

ブラウスのボタンを一つ一つ外しながら、涼はわたしにキスの雨を降らした。

「沙都……俺……とまんねえ」

ブラウスをはぎ取られて、ブラの上から、手のひらで胸を包まれた。さすがに恥ずかしかったけど、振り払うなんて考えなかった。

唇をふさがれたまま、背中のブラのホックを外された。

ブラによって形づけられていた胸がフワリと緩んだ。

涼の唇が下に降りてきて、胸にキスをする。

少し、茶色掛った髪の中に指を入れて、恥ずかしさをまぎわらした。からだ中が火照りだした。

涼によって、だんだん心が熱くなり、大きな息を漏らした。

じわじわと汗がにじんで。

涼の匂いがこんなに近くに感じられて大きな安心感に包まれているのが分かった。

きっかけなんて、こんなもんだったんだ。

いつもそばにいた涼の体温がこんなに間近で感じて、イヤなどころか、

身体中がもっと、もっとと叫んでいるように涼を欲しがった。

決定的な何かがなければ、わたしと涼はいつまでも平行線で、交わ

ることなど無かった。はず。

「あ……涼……」

「沙都……沙都への思いは……中途半端な思いじゃないから」
涼の声に閉じていた目をゆっくり開いた。

お互い……何もまとわない、裸のままだった。

いつもそばにいて、兄妹のように育って来た。

一緒に、こんな風に裸になってお風呂に入ったことさえあった。

何年前だろう？

まだ、十六歳同士だけど……わたしたちはいつの間にか大人になっていた。

誕生日は涼の方が早かったけど、わたしのほうがいつも涼を引っ張って来た。

泣き虫だった涼の身体は、とても筋肉質で、大人の男の身体だ。

それとは逆にわたしは胸がふくらんで来て、薄着で涼に近づくと、
フィに目をそらしたりした涼に

「スケベ」

なんてからかってきたけど

今は、そんなこと言え無くて……

涼が、わたしを大事に思ってくれているのが伝わって来たから、何も言えず、ただ

涼の思うままに。

身体をゆっくり開いて……

涼と一つになった。

「沙都……沙都……好きだ。俺、沙都が好きだ」

耳元でなんともささやいて来た。

痛くて歯を喰いしばった。

顔をしかめたわたしに、優しく何度もキスをしてくれた。

でも、とても幸せな時間だった。

涼の甘い吐息に頭がクラクラして来た。

力強くて、優しくて……涼が愛しくて仕方がなかった。

涼に抱かれて

二人だけの涼の家で、気が付けば窓の外はオレンジ色が消えて、薄紫に変わっていた。

「さ……沙都？」

涼がわたしの髪の毛をかきあげて来た。
わたしは涼のベッドにうつ伏せのまま。

「沙都？ 大丈夫か？」

涼があんまり優しい声でそう言うから涙が込み上げて来た。

「もうすぐ……母さんが帰ってくる」

「うん……」

涼の顔が恥ずかしくて見られなかった。

「お前……断われよ」

「……」

「青木なんかと付き合うなよ」

「じゃあ……涼が彼氏になってくれるの？」

枕に顔を押し付けてそう言った。

「今さら……だよな」

「え？」

「今さら、沙都和付き合ってますなんて、宣言しにくい」

「はあ？」

「お前、クラスのみんなに言えるか？ 俺が彼になったって。父さんや母さんたちにいえるか？」

いつもみんなでつるんでいるメンバーが頭に浮かんだ。

そして、自分の両親の顔も頭に浮かべた。

この上なく冷やかされるに決まっている。

「確かに……言いにくい」

「オヤジには、結婚相手がいなかったら沙都にしろとか冷やかされてるし……そのまんまだし、シヤクにさわる」

「沙都、ほら、早く服着ろ」

涼が制服のブラウスを放り投げて来た。

「涼……ブラがさき。取って」

枕に顔を押し付けて、腕だけ涼に差し出した。

「ブラって……」

涼がベッドの下に落ちたブラを拾って渡してくれた。

「沙都……意外と、胸あんだな」

「きゃー！きゃー！思いたさないでよ」

そう叫んで薄手の布団を頭からかぶりこんだ。

「もう、涼の頭からわたしを消してー」

「ごめん。そう、怒んなよ」

「怒る！メツチャ恥ずかしいんだから！」

「俺……沙都がなんて言おうと、今日のことは一生忘れないからなかぶり込んだ布団から少しだけ顔を出して

涼を見ると、わたしの視線に合うようにしゃがんで、じっと顔をのぞき込んできた。

「俺、今日の沙都、絶対忘れないから」
チュッ

顔だけ出したわたしの額に軽くキスを落として来た。

「俺らさ、内緒で……付き合おう」

「内緒で？お母さんたちにも？」

「うん。内緒で……」

涼のわたしを見る目が昨日までと全然違ってた。
全然違って……

とっても優しくなった気がした。

薄紫色の部屋の中で、涼がニコリと微笑んだ。

「俺、下にいるから。その間に服着ろよ」

それだけ言って涼が部屋を出て行った

涼の家で食事

着替えを終えて、階段を降りると、玄関先で涼のお母さんとはち合
わせた。

「あら、沙都ちゃん。来てたの？」

「あっ……うん。ハハハ、今日の宿題どこだったかな？ って涼に聞
きに來たの」

多分、今までで一番顔が引きつっていたと思う。

冷や汗が出てきた。

「涼は部屋？」

「ううん。リビングにいると思うけど」

「そう。沙都ちゃん、夕飯食べる？ ほら、ケンタッキー買ってきた
の」

涼によく似たお母さんがニコリと笑ってフライドチキンの入ったレ
ジ袋を見せた。

さすがに今夜はここに居たくない。

「イヤ……いいかな」

「あれ？ 珍しいなあ。沙都ちゃんが遠慮するなんて。ほら、食べて
きな」

涼のお母さんに背中を押されて、リビングに入ると、ソファに座る
涼と目が合った。

血が逆流。

顔が熱くなって沸騰しそうだった。

涼に……さっき、裸見られたんだ。

涼は平然とした顔で、目を逸らす。

「あれ？ もしかして、二人ケンカでもした？」

涼のお母さんがわたしと涼の顔を交互に見る。

「ケンカなんかしてないよ。なあ？」

涼がチラリとこっちを見て、直ぐ目をそらす。

「うん。うん。ケンカなんかしてない」

「そう？ ヤケによそよしく見えたから」

涼がテーブルの上の新聞を手にして顔を隠して

「それより、俺、腹へった」

涼……お願い。そのままずっと顔を隠してて。

夕飯のしたくができて、涼と隣同士で椅子に座った。

わたしの目の前には涼のお父さんがニコニコした顔。

涼のお父さんはわたしがここに来るといつも上機嫌だ。

でも、今夜はなんか、ぎこちなくて、ソワソワしてしまう。

前も見れないし、隣の涼の顔も見れない。

モクモクとご飯を食べた。

「沙都ちゃん、元気ないね。どうかした？」

「いえ……なんもないです」

「いつもの食欲がないんじゃないのかい？」

涼のお父さんがニコリと笑う。

わたし、いつもそんなに食べてるのかな？

「ちよつと……ダイエット中で……」

「もしかして……沙都ちゃん彼氏出来たとか？」

「そ……そんなじゃないです」

「沙都に……彼なんか、できるはずないじゃん」

涼がポツリと呟いた。

「あゝ。わたし、友達から電話が掛けて来るんだ。携帯を家に置いて来たから、帰ろうかな」

そう大声を出して、立ち上がった。

「ごちそうさまでした」

「イエイエ。涼だって、沙都ちゃん家で、食べたりするんだし、また、夕飯食べに来てね」

涼のお母さんが、そう言って、お茶を飲んだ。

「俺、ちよつと……コンビニ行って来る」

わたしと同じように涼が立ち上がった。

涼と二人、玄関を出ると、フイに涼が腕を掴んできた。

「沙都……お前、意識しすぎ」

「当り前じゃんか」

「あのさ……もしかして、後悔してるのか？」

涼が顔を上げて、わたしをジッと見つめてきた。

下を向いて顔を横に振り

「ううん。後悔……してない」

「そっか。それなら良かった。沙都……明日、学校終わったら部屋に来いよ」

「部屋？」

「俺の部屋。明日も、母さん帰りが遅いし」

毎日通ってた涼の部屋。

前の日から来いだなんて、初めてだ。

涼は……わたしを呼んで、どうするつもりだろう？

「絶対に来いよ」

「明日……青木クンと一緒に帰る約束しているんだけど……」

「青木に断るんだろ？」

「うん。その時、青木クンに話そうかと思う」

「じゃあ……その後くればイイだろ？ 俺、待ってるから」

「うん。分かった」

わたしの家の玄関前で、涼と別れた。

その夜、青木クンからメールがあった。

僕の可愛い彼女ちゃんへ
これからはよろしくね。

友達に美味しいケーキの店聞き出したから
あした、学校の帰りにより道しよう。

そう、書かれていた。

青木クンがわたしのことを好きだってきもちがよく分かった。
あしたはなんて言おう。

「やっぱり、付き合えません」
そう言うしかなさそうだ。

次の日学校で

次の日、教室に入ると友達の栗木真菜がわたしに飛び付いて来た。

「沙都、おはよ。聞いたよ。青木クンと付き合うようになったんだって？」

真菜の大声が教室中に響いた。

朝連で、先に来ていた涼が、こっちを見てきた。ちよつと怖い顔になった。

涼……

「えー。沙都和青木クンが？」

いつもつるんでる一人が駆け寄って来た。

「じゃあ、みなでお祝いしよう」

「祝福にはカラオケだね」

何かあると直ぐにみんなカラオケに行きたがる。

涼がまたこっちを見てきた。

胸の奥がキュンとなった。

何も言わない涼。

気だるそうに椅子に座って窓の外を見ている。

上から三個目まで開けた制服のシャツから筋肉質の肌が見えた。

「沙都……好きだ」

昨日の涼の言葉。

あの胸に抱かれたんだ。

あの目に全てを見られたんだ。

そして、あの背中にしがみ付いた。

そう思うとまた、恥ずかしくなった。

「沙都？ ものすごく顔赤いよ。そんなに嬉しい？」

「そ……そうじゃないよ」

必死で首を振った。

真菜の言葉に涼が反応して、またこっちを見てきた。
目を逸らした。

やっぱ、涼の顔まともに見れない。

この場から消えてなくなりたかった。

「男子〜。行きたい人〜」

真菜のこの指とまれが始まった。

「俺行く〜」

涼の隣の席の男子が声を上げた。

「涼も行くだろ？」

当然みたいに涼の名前も出した。

結局、涼を含めたいいつものメンバー六人プラス青木クンで、カラオケに行くことになった。

意識し過ぎのわたし

授業中は、全然身に入らなかった。

背中から、涼の視線を痛いほど感じていたから。

実際にわたしを見ていたのか、分からなかったが、変に意識し過ぎているわたしがいた。

昨日のことを思い出しているんじゃないのか？

ブラウスを脱いだわたしを想像しているんじゃないのか？

そんなことを考えると、体中の血液が両耳へと逆流し、象の耳みたいに大きくなり、真っ赤になってパタパタ動いているように思えた。

『沙都の耳真っ赤だ』とか思われているんじゃないか？

支離滅裂なことばかりを考えて、授業を終え、休憩時間に入っても、涼の席を見ることが出来ずにいた。

後を振り返れない。

大きなため息を付きながら、椅子に座ったまま、机に顔をひっ付けた。

消えて無くなりたいたい……

涼への気持ちは意識して無かった分、かなり自分へ打撃を受けた。

こんなに涼が好きだったなんて……

机に伏せったまま、また、大きなため息を付いた。

その日のお昼やすみ。青木クンからメールが来て一緒に食べないかと誘われたが、そんな気になれなくて、何かと理由をつけて断った。今日は朝から、わたしの彼が出来たとその話で持ち切りだったから、苦しくて一人になりたかった。

青木クンに断りを言っていないのに、みんなに否定出来なかった。

青木クンを出来るだけ傷付けたくない。

人気の無い向かい校舎の二階の踊り場。

大きくため息を付いてしゃがみ込んだ。

「沙都……」

聞き慣れた涼の声がした。

見上げると朝からずっと怖い顔の涼が立っていた。

「涼……」

「あんまり……嬉しそうな顔してんじゃねえ」

「涼……」

「もうちょっとで、俺が沙都の彼だって言いそうになった」

立ち上がって涼の腕を引っ張った。

「涼……青木クン傷付けたくないの。だから……お願い、みんなに言わないで。ちょっと待って」

「沙都……」

腕を引き寄せられて抱きしめられた。

「りょ……」

唇で思い切り塞がれ、いきなり舌を絡めて来た。

腰を引き寄せられ、逃げられない。

「あ……」

昨日、何度も交わしたキス。

また、頭の中がボウっとなった。

涼の顔が恥ずかしくてギュッと目を閉じた。

何度も角度を変えて、カブリつくようなキス。

人が来たらどうしよう。

なんて、言いわけすればいい。

抵抗できないまま、膝の力が抜けそうだった。

「あふ……」

「沙都ごめん……もう、俺、沙都への思いは抑えねえから」
そう言ってまた、唇をかさねてきた。

「涼……」

「沙都は……誰にもやんねえ」

「涼が……好き」

授業開始のチャイムがなるまで、わたしは何度も涼とキスをしてい

た。

いつものメンバーで

部活が終わって、みんなと校門で待ち合わせた。
チアリーダー部のわたしと真菜が一番早かった。

「やっぱ運動部は遅いね」

真菜がポニーテールに結んでいた髪をほどこながらそう言った。

「うん。後かたづけとかあるもんね」

グラウンドの方を見ると、陽に焼けた青木クンが手を振りながら走って来た。

「沙都ちゃん」

青木クンの笑顔にドキンとした。

でも、このドキンは好きな人に向けてのドキンじゃなくて
彼女になったその日に青木クンを裏切ったわたしの良心が、ドキン
としたんだ。

青木クンの笑顔には、わたしに対しての疑いなどひとつもない。
ドキン

「沙都ちゃん……なんか……みんなからお祝いのカラオケとか聞いて
びっくりした」

そう言いながら、わたしの目の前に立った青木クンはとても嬉しそう。
う。

「うん。ごめんね。いつものグループにつき合わせちゃって」

「ううん。それだけ沙都ちゃんが人気者ってことだろ？」

そう言って……

さり気なく、わたしの手に触れて、握りしめてきた。
これって……

「おう。さっそく恋人繋ぎですか？ な〜んか当てられるな〜。この
ままじゃ、わたし、完全にオジヤマ虫だな。もう、みんな早く来〜
い」

真菜、ソワソワとグラウンドに向けて大声をあげた。

わたしは、青木クンの手を振り払えずにいた。

そして、後悔した。

こうなる前に……真菜にだけでも事情を話すべきだったと。

今日のこのカラオケも中止して貰えば良かった。

いつもの乗りに乗っかって、ズルズル来てしまった。

涼とのことを隠そう、隠そうとする思いが結局何も言い出せず、何も行動出来なかった。

涼とあんなことがあって、正直今日の授業中だって、涼とのことでいっぱいだった。

恥ずかしいのはもちろんだけど、いつもそばにいた幼なじみの涼が急に男の子として変貌したんだ。思い出すだけで胸がいっぱいになった。涼の手とか吐息とか匂いとか、何度も鮮明によみがえって来たんだ。その度に顔が熱くなって、冷や汗が出て来ていた。

今まで涼は傍にいたけど、わたしから、最低二十センチの距離はずっと保ってくれてた。

たまにジャレあって、身体に触れたりしたことはあったけど、その度にゴメンと言って

謝ってくれてたのは涼のほうだ。

今思えば、涼は確かにわたしに優しくかったし、いつも気を使ってくれてた。

辛い時だって、何も言わず、傍にいてくれてた。

鈍感。

涼の気持ちにも、自分の気持ちにもあんなことが無いと気付かないわたしは、この上ない鈍感女だ。

いつものメンバーで

涼……今のわたしと青木クンを見たら、なんて思うだろう。

どうしよう……

涼とのことで浮かれている場合じゃないのに……

「沙都ちゃんの手、ちいさいね。俺の手、マメだらけでゴツゴツしてるだろう？」

野球のバッドを握るからなのか、確かに手のひらがゴツゴツしていた。

こんなこと言われたら、ますます手を離せなくなった。

次に、校門前に現れたのは、涼と、涼と同じサッカー部西本達樹だった。

「あつれ。沙都、もうラブラブ見せつけてやんの」

達樹のその言葉と同時に涼と視線が絡み合った。

口を一文字に結んで、明らかに怒った様子だった。

思わず、青木クンの手を振り払おうかと躊躇したが、やはり青木クンのことを思うと実行に移せなかった。

涼と達樹の後を必死で追いかけて来た見られる吉村水華が

「なに？ラブラブしたいの？」

そう言いながら、達樹の腕に巻き付く。

水華は達樹の彼女だ。

剣道部の水華は、長い髪を女剣士らしくキリリとしめ上げ、女のわたしから見てもかなりカッコいい。

「沙都、稲本今日はパスだつてさ」

稲本和也とは、水華と同じ剣道の男子部員だ。

「えー稲本パス？じゃあ、わたし、今日だけ涼の彼女になろつと」
あぶれていた真菜が涼の腕に巻き付いた。

ドッキン

真菜の行動に今日、一番の胸の高鳴りを感じた。

胸が大きく音を立てて、苦しくなった。

「今日だけじゃなく、ついでに付き合っちゃいなよ」

水華が、達樹の腕に巻き付いたまま切れ長の目をクリクリさせた。

「うーん。でもなあ、涼は二、三年生の先輩たちに超、人気があるしなあ。付き合うとなると厄介だな」

真菜がそう言いながら先輩たちがいないか、グラウンドの方をうかがう。

「畑野涼くん、サッカー部だね。うちのクラスの女の子たちにも人気あるみたいだよ」

何も知らない青木くんが気兼ねなく涼にそう、話かけた。

「人気なんて無いし……真菜、俺にだって選ぶ権利あんだからな」

涼が不貞腐れた顔で、そう言ってプイと顔を横向け、スタスタ歩き出した。

そう言われた真菜はそれでも涼の腕を離そうとせず、後に続いた。

「俺らも急ごう」

達樹がわたしたちに向かってそう言い、わたしと青木くんも涼を追いかけるように歩き出した。

カラオケボックスで

ルルルルルル　ルルルルルル　ルルルル

少し歩きだしたと同時に、青木クンの携帯が鳴り始めたのか、わたしの手を離して、四、五メートル後に下がった。

別の友達からのようで、嬉しそうに話し始めた。青木クンの電話を立ち止まって、待っていると、前を歩いていた達樹が一人でわたしの方に近づいて来て

「涼さあ。さっきまで部活で、すっげー上機嫌だったのに、ここに来た途端ご機嫌斜めになったぞ。沙都、お前……涼となんかあったのか？」

いつになく真剣な顔の達樹。

「ううん。何もないけど」

「お前らさ……俺にだけは嘘付くなよ。俺と涼と沙都はどれだけの時間一緒にいると思ってんの？別に言いたくないならそれでいいけどさあ。まあ、後で涼を尋問にかけるし」

それだけ小声で言って、一回わたしの肩を叩いて、水華の方へと駆けて行った。

達樹……

涼と一緒に小学校の頃からずっとサッカーをやって来たんだ。

当然、わたしとも長い付き合いだ。

そんな達樹が、わたしと涼の関係にいち早く気が付いても、不思議はない。

達樹に話せば……お前、何やってんの？

そう、言って失笑されるだろう。

カラオケボックスで

青木クンの電話が終わり次第、いつものカラオケ店に向かった。店に着くと涼が先に店員に部屋をかけあってくれていた。

あいかわらず、真菜が涼の腕にしがみ付いて離れていない。

真菜の横顔をうかがった。

とても嬉しそうな顔をしている。

真菜……

もしかして、真菜は涼のことが……

自分の気持ちにも、涼の気持ちにも気が付かなかったわたしが、真菜の気持ちに気付くはずない。

あのアイドルが好きだ、こっちのほうがカッコイイ。そんな、現実味の無い当り障りのない話題でいつも盛り上がっていた。

真菜とも水華とも高校に入学してから友達になった。

友達になって、まだ三カ月しか経っていない。

高校に入ると、達樹に水華という彼女が出来て、それで、少し、テレビの向こうの世界ではなく、真面目にだれかステキな彼と付き合いたいと思い始めていた矢先だった。

わたしにとって、このクラスの仲間はワイワイ言い合うただの友達に過ぎなかったんだ。

だから、涼はだれが好きだとか、真菜はだれが好きだとか、気にも止めていなかった。

昨日、涼と抱き合って、眼の前にかかっていたフィルターが消えてなくなった。

見るものが変わって見え始めた。

そして、大事なモノが……くつきりとしたかたちで、目の前に現れた。

涼……

いつも傍にいた涼の全てが愛しくて、心の底から無言で叫んでいた。

『涼から離れて』

青木クンには悪いと思ったけど、電話が終わって駆け寄って来た時、わたしは手を制服のベストのポケットに突っ込んで、手は繋ごうとしなかった。

青木クンはその話題はスルーしてくれたけど、やはり、気を悪くしたにちがいない。

店員に部屋へと案内され、十名ほど入る個室へと入った。涼は相変わらず不機嫌な顔で、真菜の手を振りほどいてドカッとソファに座った。

涼の隣には、すかさず真菜が……

わたしはそんな涼と真菜に向かい合うように青木クンと隣同士にソファに座った。

達樹と水華は、涼と真菜の隣に座り、早速歌う歌を検索し始めている。

薄暗い部屋の中で、達樹と水華の笑いあう声が響いていた。

青木クンの横顔をチラリと見ると、歌う気は無さそうで、ドリンクメニューを手に使っていた。

達樹がマイクを手にして歌い始めた。いつもなら、涼がこれでもかとヤジを飛ばすのに、今日は一言も声を掛けずに、選曲用のリモコンばかりを弄っている。

わたしも歌う気にもなれず、そんな涼の姿をボンヤリと眺めていた。達樹の歌が済んで、水華、真菜へと続いて、また、さっき歌ったばかりの達樹がマイクを持った。

青木クンは好きな歌ばかりだと言って、みんなの歌を聞き入っていた。

注文したみんなのドリンクが運ばれてきて、それを全て飲みほした頃、青木クンが急に席を立った。

「沙都ちゃん。あのさ、俺、今から同じ野球部の子の家に県大会の日程表のプリントを持って行かなきゃいけないから、これで帰るよ」
「日程表？」

「うん。そいつ、今日は部活を休んだからさ」
すると、真菜が

「沙都も一緒に帰っていいよ。ラブラブして、二人きりで帰りなよ」
気を利かせているんだぞと言わんばかりの勢いで、そう言ってきた。
「じゃあ……沙都ちゃんも途中まで一緒にかえろ？」

立っていた青木クンがわたしの腕を掴んで引っ張り上げて来た。
二人切り……

『ごめんなさい』を言ういい機会かもしれない。
青木クンに付き合えないと断りを言う、絶好のチャンスだ。
だけど……心は、涼と真菜のことが気になる。

真菜に涼を持って行かれそうで……そう思うと胸が苦しくなった。

青木クンに腕を引っ張られたまま、席を立った。

「みんなの沙都ちゃんは俺が責任持って送り届けるからさ」

青木クンが気さくにそう言ってみんなに笑い掛けた。

「沙都。今日はわたしたちの奢りだからね。お金は気にしない
でよ」

水華がニツコリ笑って、手を振ってくれた。

「うん。ありがと。じゃあね」

みんなに手をふる青木クンに、腕を取られたまま、個室の出入り口
ドアの前で涼の顔を窺った。

これでもかと言うくらい、熱い視線を浴びせて来た。

目力が凄かった。

そんな涼と見つめ合いながら、涙が出そうになったが、青木クンに
促されて、個室の外に出た。

二人きりの帰り道

店の外は陽が落ちて、薄暗い紫色の風景だった。街燈がポツリポツリと付き始めて、会社帰りのサラリーマンや下校中の学生たちが歩道を行き交っていた。

その人ごみの中を、青木クンと肩を並べて歩いた。わたしの手はやはり、制服のベストのポケットに手を突っこんだままだった。

わたしより、二十センチ以上も背が高い青木クンが俯き加減で話しかけて来た。

「沙都ちゃんって……西中出身だよ」

「うん。そうだよ。さっきのメンバーの男子たちもみんな西中出身だよ」

「俺さ緑中出身なんだけど。中学の時、一度、西中で練習試合したことあるんだ。その時、沙都ちゃん、何人かの女子たちと応援に来てたこと覚えてない？」

ちょうど一年程まえ、同じクラスだった野球部の子の練習試合をクラスの女子何名かで即席のチアリーダー部もどきを結成して、応援したことがあった。ラメ入りのポンポンなんかを作って、冷やかし半分で、応援したことが……

「行ったことある。あれ、緑中との試合だったの？」

「酷いなあ。応援に来て相手チームの学校も知らなかったの？」

練習試合だし、勝つか負けるかだけしか考えて無かったから、相手チームがどこかあまり気に止めてなかった。

「あの試合で……沙都ちゃんを見て、可愛い子だっと思ってたんだ。自分のチームがミスしても、点入れてもキャッキャッ笑って騒いでたよね」

確かに、応援していたと言うより、騒いでたっけがあった気がする。

「青木クンってポジションどこ？」

「俺？一応ピッチャーしてたんだけど。試合しながら、相手チームのチアリーダーのこと見てたって、それともかなり問題があるんだけどね」

青木クンが照れくさそうに笑った。

結局、あの試合は、うちのチームがボロ負けして、クラスの野球部に女子全員でカツを入れてやった。

その時、野球部たちが言ってた。

『相手のピッチャーが良過ぎたんだ。あいつ、県の選抜ピッチャーだぞ。俺らが打てるわけないだろ？』

その開き直った態度にもう一度、女子全員で激怒した覚えがある。

「高校に入学して、一番先に沙都ちゃんのこと見つけて、あの試合の時を思い出したんだ。だから、こうして、彼女になってくれて、俺、凄く、嬉しいんだ」

青木クンは……中学の頃から、わたしのことを知ってて、それで、昨日、告白してくれたんだ。わたしの彼が出来ればそれでいいなんて、中途半端な、浅はかな考えじゃなかったんだ。

さっきの涼と真菜の二人の光景を思い出した。

真菜に涼を取られたくない。

今……言うしかない。

『ごめん』って言うしかない。

こんなに涼のことが好きなのに……青木クンとは付き合えない。

「ねえ。青木クン……あのね。わたし……」

「危ない！」

後から、通行人の男の人の叫び声が聞こえた。

まさかの事故

その声に驚いたわたしは、青木クンに話しかけるのを止め、声のした方へ振り返ると

いきなり、左側を歩いていた青木クンに突き飛ばされた。

突き飛ばされた勢いで、わたしは歩道の上に両膝を着いた状態で、倒れ込んでしまった。

キィー！

自転車の急ブレーキの音。

少し、下り坂の人が行き交う薄暗い歩道。

ギャシャーアーン！

その音と共に、隣にいた青木クンと自転車に乗った、女子高生が一緒に雪崩れ込むように倒れた。

青木クンの腰に自転車の前輪がブレーキの音と共に追突したのだ。

国道と歩道の間に設置されたガードレールに、叩き付けられ地面に倒れ込んだ青木クン。

その背中に自転車と女子高生が折り重なるように倒れ込んだ。

「バカ野郎！」

通行人の男性が、その女子高生に罵声を浴びせた。

「大丈夫？」

中年のオバサンが、倒れたままの青木クンに駆け寄る。

その女子高生の耳にはイヤフォン。

「片手でメール打ってよ。この子！」

駆け寄って来たサラリーマン風の男性の声。

「あなた、無灯火じゃない！」

OL風の若い女性の声。

片手運転の上に無灯火。その上、耳にはイヤフォン。

わたしは身体が震えて歩道にしゃがみ込んだまま、立てずにいた。歩道に落ちたピンクの携帯。

倒れた自転車の後輪だけがカラカラ回る。

その光景を茫然と見ていた。

自転車に乗っていた長い茶パツの女の子が、中年のオバサンに助けてもらってヨロヨロと立ち上がった。

そして……青木クンが倒れたまま動かない。

「額から大量の血が出る。救急車を呼んだほうがいいでしょう」歩道沿いの理髪店のおじさんが音と共に飛びだしてきて、倒れたままの青木クンを見て、サラリーマン風の男性にそう話しかけた。その男性は直ぐにスーツのポケットから携帯を取り出し、操作し始めた。

「あなたは、怪我は無い？」

理髪店の奥さんがわたしの顔を覗き込んでそう、たずねて来た。

身体も、膝も、顎もガクガク震えて返事さえ出来ない状態だった。

青木クン……

額から大量の血……

一瞬のことで、青木クンはわたしを突き飛ばすのが精一杯で……

自分の身を庇えなかったんだ。

通行人が何人も集まってきて、わたしたちを取り囲む。

グツタリした青木クンを見詰めながら涙がワツと溢れて来た。

理髪店の奥さんの肩に凭れかかるようにして立ち上がった。

回りの喧騒とした雰囲気は伝わって来ていたが、涙が溢れた目だけを見開いていた。

倒れた自転車の籠がグニヤリと折れ曲がっていて、どれほどの勢いで追突したのかを物語っていた。女子高生は右太ももと右膝をすり剥いて、血が出ていた。若いOLと中年のオバサンに両脇を抱えて貰ってようやく立っているといった感じだった。

まさかの事故で

理髪店の奥さんの肩に凭れかかるようにして立ち上がった。回りの喧騒とした雰囲気は伝わって来ていたが、涙が溢れた目だけを見開いていた。

倒れた自転車の籠がグニャリと折れ曲がっていて、どれほどの勢いで追突したのかを物語っていた。

女子高生は右太ももと右膝をすり剥いて、血が出ていた。若いOLと中年のオバサンに両脇を抱えて貰ってようやく立っているといった感じだった。

「警察にも通報したほうがいいでしょうね」

救急車に連絡を入れてくれたサラリーマンが理髪店のオジサンにそうたずねた。

「怪我人が出ているんだ。仕方ないでしょうね」

オジサンのその言葉に女子高生が青ざめて震え出した。どこにでもいるわたしと変わらない普通の女子高生。

イヤフォンに肩手携帯。

わたしも何度かしたことがある。

警察……

怪我人……

わたしたちは被害者だけど、決して人ごとではない事態。れっきとした犯罪になるんだ。

理髪店の奥さんに腕を掴まれたまま、また全身が震え出した。

すると、倒れていた青木クンの足がピクリと動き出した。

「君、大丈夫か？」

サラリーマンが足を動かした青木クンに声を掛けた。

倒れたままの青木クンを見ていて、頭の隅で、もしかして死んでいないんじゃないかと震えていたわたしは、青木クンの微量の動きに安

堵しホッとした。

青木クン……

青木クンは起き上がろうとしている様子だったが

「頭を打っているから大事を取って動かさないほうがいい。このままで、救急車を待ちなさい」

理髪店のオジサンがうつ伏せに寝ている青木クンの傍にしゃがんで耳元でそう囁いた。

青木クンは起き上がるのをやめた。

「青木クン！」

我に帰ったわたしは、オバサンの腕をはらって、青木クンの傍に駆け寄り理髪店のオジサンの隣にしゃがみ込んだ。

青木クンの額は血で真っ赤で、短髪の髪には土埃が付いていた。わたしの声に左目だけを薄く開いてくれた。

「お嬢ちゃん、これ」

理髪店のオバサンが理髪店の名前の入ったタオルを差し出してくれたので、それを受け取り、青木クンの額にそっとあてがった。

そんなわたしの顔が見えたのか、口元が少しだけ弧を描いた。

遠くの方から救急車のサイレンが近づいて来た。

周囲を取り囲んでいた通行人たちが、救急車の音に反応して、わたしたちの傍から離れ出した。

総合病院に運ばれて

青木クンとわたしは、二人一つの救急車に運ばれた。

膝を擦り剥いただけのわたしは、青木クンの付き添いとして乗り込んだ。

救急車に乗り込んだ時、救急車の後にパトカーが滑り込んで来て、三人ほどの警官がゾロゾロと降りて来た。そして、女の人たちに支えられていた女子高生を取り囲んだ。

体格のいい警官たちが笑顔一つ見せず、サラリーマンの男性や理髪店のオジサンに話を聞いていた。

それは、とても怖い光景に思えた。

わたしと青木クンは被害者で、怖い思いをしたが、これから置かれるその女子高生の立場を考えると寒気がした。でも、一番不憫なのは、わたしを庇って、怪我をした青木クンだ。

さっきまで、元気にわたしに話しかけて来ていた青木クンだったのに今はぐったりとしたままだ。

担架の上に乗せられた青木クンの手を泣きながら、ずっと握りしめていた。

総合病院に着いて、青木クンは救急搬入口から救急治療室に運ばれた。

救急治療室の前に置いてある待合の椅子に座り、閉じられた扉をジッと見つめていた。

救急治療室の前は薄暗がり、一人切りのわたしは、寂しい思いと、不安な思いが交互して、何とも言えない気持ちになった。

ここに来てからすぐに、警察官と救急隊員に青木クンの身元やわたしの身元を事故の状況などを聞かれた。

ただでさえ関わったことのない人たちの前で、受け応える中で、心ぼ即手、終始震えていた。

取り調べが終わり、わたしは一人、この場所に取り残された。

青木クンをそのままにして、家には帰れない。

どうしよう。

青木クンの身になにかあったら……どうしよう。

そう思うと涙が止めどなく流れて来た。

その薄暗がりの中で、ハンドタオルを眼にあてて泣いていた。

青木クンのお母さんが駆けつけて

しばらくすると、救急搬入口に中年の女性が駆けこんできた。その女性は入口の受付警備員に『青木』と名乗った。

その言葉に立ち上がって、その女性に軽く会釈をした。

「光輝のお友達？」

そう言いながら駆け寄ってきた。

声が出なくて、首だけ縦に振った。

近くで見ると、青木クンに良く似ていた。

青木クンのお母さんのようで、何処かの会社の事務員の制服を着ていた。

「ごめんなさいね。付き合わせたみたいね。自転車の事故だって、警察から連絡があったの」

「青木クン……頭から血が出てて……」

思い出ただけで言葉が詰まった。

すると、救急治療室の扉が開いて、中から女性の看護師さんが二人現れた。

「青木さんですか？」

「はい」

「担当医からの説明がありますので、中に入って下さい」

青木クンのお母さんが看護師にそう促された。

「あの……青木クンの容態は？」

看護師にすぐるような声でそう聞いた。

「ええ。髪の毛の生え際を少し切ってて、そこを少し治療しましたよ。大丈夫ですよ」

看護師が気を聞かせたのかニコリと笑ってそう言ってくれた。緊迫していた心がその笑顔で楽になった。

「青木クン、大丈夫なんですか？」

「出血多くてびっくりしたでしょうが、もう、大丈夫よ」

もう一人の看護師も笑ってくれた。

「色々ありがとうね。ここはもう、大丈夫だから、早く家に帰ってね。お家は遠い？」

青木クンのお母さんがわたしを心配したのか、そう聞いて来た。

「いえ、そう、遠くないです。帰れます」

軽くお辞儀をすると、看護師二人と青木クンのお母さんが救急治療室の中へと向かった。

三人の背中を見送ってから、もう一度椅子に座って大きく息を吐いた。

真菜からの電話そして……

その後、電車を乗り継ぎ、家へと向かった。時間はすでに八時を過ぎていた。

一応、家に電話をしたが、誰もいないのか出なかった。

駅から自宅への道を歩きながら、携帯をカバンに仕舞おうとしてみると、

チャカチャカチャカ

チャカチャカチャカ

真菜のお気に入り曲が鳴り出した。

この着信音は真菜だった。

慌てて出て、耳にあてた。

『沙都？ 今、電話大丈夫？』

明るい真菜の声がした。

「うん。大丈夫だよ」

『あのさ、沙都に言いたくて電話したんだ』

「何？」

『わたし、涼のこと頑張ってみる』

涼のこと……

携帯から聞こえた真菜の声にまた、胸がドキンとなった。

「涼……って？」

『さっきね、家まで送ってもらったの。不貞腐れてて面倒くさそうな顔してたけど、もう、暗いからって、結局家まで送ってくれてさ。涼って優しいね。カラオケでも、ブツブツ言いながら、リクエストした曲は全部歌ってくれたしさ。涼が優しいのは沙都限定だっと思ってたから、なんか、とっても嬉しかったんだ』

弾んだ真菜の声。

わたしと青木クンが帰ってから相当楽しんだように思えた。

確かに涼は優しい。

誰にでも気を使う子だ。

小さい頃から、自分に出来ることは相手を選ばず、優しく出来る子なんだ。

沙都限定……

真菜にはそう映ってたんだ。

涼の気持ちに薄々気付いていた。

真菜は……

涼が好きだったんだ。

そして、わたしに彼が出来たことに寄って、真菜は、なんの気兼ねも無くなった。

（涼のこと頑張ってみる）

真菜の素直な言葉が頭の中でリフレインして、胸が張り裂けそうになった。

『沙都？ 元気ないね。青木クンと何かあった？』

血まみれで倒れていた青木クンが鮮明に思い出された。

今ここで、青木クンの事故のことを話すべきか……

青木クンの今のちゃんとした容態は分からない。

ヘタに大げさなこと言って、青木クンに迷惑がかかるといけない。

小さな噂が大きくなって飛び交うことはよくあることだ。

学校にはすでに連絡が行っているはず。

明日になれば、みんなに知れ渡る。

それからしよう。

今は……言わないほうがいい。

「ちょっと……色々あって……詳しいことは明日話すよ」

『色々？ なになに？ もしかして、キスとかされた？』

「そんなんじゃないよ。そんなんじゃない！」

真菜の見当はずれの明るい声と言葉の内容に声を荒げてしまった。

ツウツウ

ツウツウ

どこからか電話が入ったようで、通話中着信音が鳴った。

「真菜、ごめん。他から電話が入ったから切るね」

真菜からの返答も聞かずに、慌てて電話を切った。

これ以上真菜と話しをすると、涼とのことと青木クンのことが入り混じって、真菜を傷つけてしまいそうだった。

今のわたしには、真菜に対して、当り障りのない相槌を打つほどの余裕がなかったのだ。

液晶画面には、涼の名前。

電話は涼からだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5429y/>

初めては幼なじみ

2011年11月21日21時31分発行